

Empirical Labs EL8 Distressor

UADとApolloで使用するために忠実に再現されたもっとも一般的なコンプレッサー

1993年に発売されたEmpirical Labs EL8 Distressorは、世界中のスタジオで“必須”のコンプレッサーとして評価を受けています。汎用性が高く、高速で、豊かなカラーを提供するDistressorは、UA 1176やTeletronix LA-2A compressors等を使用していないシーンで多用され、多くのヒットレコードで聴けるように、実用的で、クリエイティブに使用できるモダンなツールです。

UAD Empirical Labs EL8 Distressor は、Empirical Labs の創設者であるDave Derrによって承認された唯一の本物のDistressorプラグインは、UADハードウェアとApolloインターフェイス専用です。Derrの象徴的なハードウェアを網羅した詳細なエミュレーションであるUAD Empirical Labs EL8 Distressor は、この無限大の可能性を持つコンプレッサーの唯一忠実なエミュレーションです。

Now You Can:

- 世界中で愛用されているEL8 Distressorの唯一本格的なエミュレーションを使用してトラックキングとミックスが可能。
- ギター、ボーカル、ドラムにほぼ無限のゲインリダクション・バリエーションを与え、徹底的なシェイピングを行う。
- 有名な“Dist 2”と“Dist 3”モードによるクリエイティブなカラーを楽器やボーカルに加える。
- カスタムディテクター・フィルタリングによりベース、シンセ、ルームマイクのサウンドを飾り、パンプアップします。

唯一本格的なDistressorのエミュレーション

Empirical Labs EL8 Distressor Compressorプラグインは、オリジナルDistressorの設計のすべての機能やカラフルなサウンドを提供しています。UAのDSP開発チームは、Dave Derrが選択したゴールデンユニットの回路の再現とコンポーネントの研究から始めました。

同時に、DSPチームは製品の世代別に3種類のDistressorsを分析し、これまでのUAでもっとも厳密なサーキットのモデリングの1つであることを保証しました。

他のDistressorソフトウェアのエミュレーションと比較すると、オリジナルハードウェアの超高速アタックタイムの再現性は、ほとんどのプラグインが実現できていませんが、UAD Distressorは見事に再現しています。

豊かなレシオのバリエーション

Distressorの核心部分は、圧倒的なレシオのバリエーション(2:1、3:1、4:1、6:1、10:1、20:1とNuke)です。1:1のレシオを使用すると、音楽的低周波ハーモニクスを加えながらシンセやストリングスのサウンドをコンプレッションせずにウォームな音色を与えることができます。その他の極端なセッティングの場合、Nukeリミッターの設定は、ルームマイクを爆発的でエキサイティングなサウンドにしたり、ミックス全体を生き生きとさせることができます。

ディストーションモード

Distressorで良く知られているDist 2とDist 3モードは、幅広いコンプレッションカラーのバリエーションがあり、偶数/奇数次ハーモニックディストーションと組み合わせてソースの音色を調整することができます。上品で厚みのあるサウンドから、テープのようなサチュレーションまで、ディストーションモードとローフリーケンシー・フィルタリングを組み合わせ、Distressorの質感を生み出すことができます。

強力なサイドチェインコントロール

Distressorのサイドチェインコントロールにより、ダイナミクスにフォーカスさせることができます。ハイパスフィルターは、不要な低周波数域のポンピングをフィルタリングでき、ドラムバスでの使用に最適です。

バンドエンファシスは、ボーカルの耳障りな部分を抑えたり、ミッドレンジの強すぎるピークを抑えたりすることができます。

柔軟なイメージングのためにバス上で使用しているDistressorのリンクをオン/オフすることができます。ドライ/ウェット・ミックスのようなプラグイン専用の機能は、ミックスバスやインストゥルメントグループ上で簡単にパラレルコンプレッションを提供します。最後にヘッドルームコントロールでは、Distressorの全体的な操作レベルを再生システムに最適化することができます。

主な機能:

- Dave Derrが設計したハードウェアをUniversal Audio専用に徹底的なエミュレーション
- オリジナルのEmpirical Labsハードウェアの回路やコントロールセット全体を提供
- オプティカル、ニュートラル、ディストーション・モード、ディテクターモードを含む7種類の固定レシオを装備
- プラグインのみの機能:ドライ/ウェット・パラレルプロセッシング、ユーザーがカスタマイズ可能なヘッドルーム

アーティストプリセット

Empirical Labs EL8 Distressorには著名なアーティストが作成した32種類のプリセットが含まれています。アーティストプリセットは、DAWアプリケーションのプリセットメニュー、UADツールバーのセッティングメニュー、またはConsole2のプリセットマネージャーからアクセスすることが可能です。

Chris Coady	Jimmy Douglass
Chris Zane	Joe Chiccarelli
Hector Delgado	Mike Larson
Jacquire King	Vance Powell

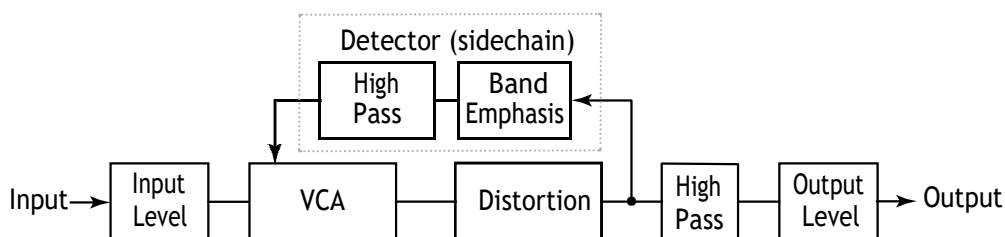
Empirical Labs EL8 Distressorプラグインにプリセットを提供しているアーティスト

Distressorのコントロール



Empirical Labs EL8 Distressorインターフェイス

プラグイン内のシグナルフローを簡単に表記した図を以下に示します。このシグナルフローを理解することでより理解を深め、良い結果を生むために役立ちます。



Distressor内のシグナルフロー

バイパス

バイパスは、Distressorサーキットを無効にしますが、グリッチフリー・バイパスなので、UAD DSPにロードしたプラグインはそのままになります。バイパス状態を切り替えるには、バイパスボタン、ラベル、LEDをクリックしてください。バイパスは、LEDが点灯しているときはアクティブです。

ゲインリダクション・メーターは、バイパスモードでもアクティブなままです。オリジナル・ハードウェアでは、このスイッチを入力を出力に直接ハードワイヤリングするリレーをコントロールします。

ヒント: プラグインをアンロードしてUADリソースを節約するには、パワースイッチを使用してください。

レシオ

このスイッチは、使用可能なコンプレッションレシオを選択するために使用可能です。各レシオは、明確なコンプレッションカーブとスレッシュホールドオフセットを提供します。使用可能な値とその設定の説明を以下に表します。

警告: ゲインを大幅に減衰させると、レシオを1:1に切り替えた場合、(レシオ1:1ではゲインリダクションされないため)出力レベルが極端に増加数可能性があります。レシオを調整する際に、出力が突然増えることを避けるには、レシオボタンで使用可能な値を循環させるのではなく、レシオ・テキストラベル、またはLEDFを直接クリックして値を変更してください。

ヒント: 使用可能なレシオを逆の順序で選択するには、シフトキーを押しながらレシオをクリックしてください。

レシオの説明

レシオ	説明
1:1	サチュレーションのみ。コンプレッション無し。シグナルをウォームにします。
2:1	穏やかなカーブを描くニーのコンプレッション。2:1のニーは、アタックとリリースの設定に応じて30 dBまでの長さにすることができます。
4:1	中程度のコンプレッションは、急激な形のニーをしています。多くのシグナルに対するコンプレッションのスタートと言えます。
6:1	
10:1	EL光学ゲインをエミュレートする特別なディテクターを備えた“Opto”コンプレッションカーブ。
20:1 NUKE	特別なディテクターサーキットによるハードリミッティング・カーブ。ダイナミックなシグナルをコントロールしたり、ルームサウンドを強調する場合に最適です。

ディテクター

このスイッチは、8種類のサイドチェインシグナル・プロセッシングモードを循環して切り替えます。各モードはダイナミクスの検出やコンプレッションの動作に明確な影響を与えます。

3つの独立したサイドチェイン機能を使用可能です。:ハイパス、バンドエンファシス、ステレオリンク。このLEDが点灯しているモードがアクティブです。これらの機能を組み合わせてすべてのディテクターモードにアクセスすることができます。

ディテクターモードを選択するには、LED、またはラベルを直接クリックするか、シフトをクリックして、複数の機能を選択することができます。ディテクターモードを逆順に切り替えるには、シフトキーを押しながらディテクターをクリックしてください。



ディテクターモード

ディテクタースイッチの状況	ディテクターモードの説明
ノーマル(ディテクターLEDオフ)	スタンダードなディテクターの動作
ハイパス	サイドチェインにハイパスフィルター(100 Hz カットオフ、6 dB/オクターブのスロープ)が適用され、低周波数帯が低減されます。
バンドエンファシス	サイドチェインシグナルの6 kHz付近がブーストされ、コンプレッサーに影響を与え、激しい高中域周波数を抑えます。
ハイパス + バンドエンファシス	ハイパスとエンファシスモードがアクティブになります。
リンク	ステレオリンクが有効になり、大きく広がったステレオソースでの一貫したゲインリダクションの動作が得られます。
ハイパス + リンク	ハイパスとステレオリンクモードがアクティブになります。
バンドエンファシス + リンク	バンドエンファシスとステレオリンクモードがアクティブになります。
HP + バンドエンファシス + リンク	すべてのディテクターモードがアクティブになります。

ユニークなモノ・ディテクターリンクの動作

ハードウェアリンクについて

Distressorハードウェアユニットはモノラルです。しかし、2台のユニットをステレオセッティングで接続するためのサイドチェインI/O端子が装備されています。2台の適切に接続されたユニットを使用すると、リンクスイッチによってステレオで使用することが可能です。

リンクスイッチは、ユニットを1台で使用する場合でもサウンドに影響します。リンクがオンでもハードウェアのサイドチェインI/Oに何も接続されていない“デッドパッチ”と呼ばれる状態の場合、スレッシュホルドの動作に影響を与え、ハーモニックディストーションを増加させます。

UADモノアウトBehavior

UAD Empirical Labs Distressor は、オリジナルハードウェアの独特なモノリンクの動作を正確にモデリングしています。プラグインをモノアウトセッティングで使用し、リンクをオンにしている場合、ハードウェアで起こる“デッドパッチ”の反応を完全にエミュレートしています。

重要: ハードウェアの独特なモノフォニックリンクの動作のため、リンクがアクティブなモノアウトセッティングで保存されているUAD Distressorプリセットは、後にステレオアウトセッティングで使用した場合、効果が異なる場合があります。

オーディオ

このスイッチは6種類のオーディオプロセッシング・モードを循環して選択します。各モードは、周波数バランスとサチュレーションに明確な影響を与えます。

3種類の独立したオーディオ機能を使用可能です。ハイパス、ディストーション2、ディストーション3。この機能はLEDが点灯しているときはアクティブです。この機能を組み合わせてすべてのオーディオモードにアクセスすることができます。

オーディオモードを変更するには、LED、またはラベルを直接クリックするか、シフトを押して複数の機能を選択してください。

ヒント: オーディオプロセッシング・モードを逆順に切り替えるには、シフトキーを押しながらオーディオボタンをクリックしてください。

各オーディオモードの説明

オーディオスイッチの状態	各オーディオモードの説明
ノーマル(オーディオLEDオフ)	特別なオーディオプロセッシングはありません。
ハイパス	80Hzに 18 dB/オクターブのベッセルタイプのハイパスフィルターを適用し、低域のもたつきを無くし、信号をクリーンアップします。
ディストーション2	2次倍音を強調するディストーションサーキットをオンにします。オーバードライブしたチューブサーキットに似たウォームなサチュレーションを加えることができます。
ハイパス + Dist 2	ハイパスとディストーション2モードがアクティブになります。
ディストーション3	3次倍音を強調するディストーションサーキットをオンにします。テープのような心地よいサウンドが得られます。
ハイパス + Dist 3	ハイパスとディストーション3モードがアクティブになります。

ディストーションメーター

これらのLEDは、トータルハーモニックの視覚的に似た値を提供し、可聴ディストーションを確認するために使用することができます。オーディオモードでディストーション2とディストーション3がアクティブな場合、ディストーションは入力アンプ、またはディストーションVCAからも計測可能です。

レッドラインLED

このLEDは、トータルハーモニックディストーション (THD) が約3%に達したときに点灯します。点灯した場合、レッドラインは、アウトプットクリッピングも表示します。

1% LED

LEDが点灯した場合、トータルハーモニックディストーション (THD) が約1%に達したときに点灯します。

電源(パワー)

パワーは、プラグインを無効にしてDSPからアンロードし、UADリソースを節約することができます。

ゲインリダクション・メーター

ゲインリダクション・メーターは、コンプレッションサーキットで発生するゲインリダクションの量を表示します。より大きなネガティブなdB値(LEDが左に移動する)は、より多くのコンプレッションが行われていることを示します。

注: ゲインリダクション・メーターは、バイパス中はアクティブなままですが、電源がオフになるとメーターは消灯します。

インプット

インプットは、インプットゲインを同時に調整し、コンプレッサーのスレッシュホールドを変更します。スレッシュホールドの変更量は、各レシオ設定のレスポンスに比例して変化します。

ハードウェアのノンリニア・インプットアンプのレスポンスを完璧にエミュレートしています。

アタック

アタックは、インプットシグナルがコンプレッサーのスレッシュホールドに達してからコンプレッションが始まるまでの時間を設定します。ノブを“0”に設定すると、アタックタイムがもっとも速くなります。アタックタイムが速いほど、スレッシュホールドより上のシグナルにはより素早くコンプレッションが適用されます。

使用可能なレンジは、50 μ Secから30mSecの間です。ただし、アタックが“0”の場合、レシオが2:1、3:1、4:1に設定されている場合にさらに高速なアタックタイムを設定することができます。

リリース

リリースは、インプットシグナルがスレッシュホールドレベルを下回った後にコンプレッションを終了するまでの時間を設定します。ノブを“0”に設定すると、リリースタイムがもっとも速くなります。使用可能なレンジは、0.05Secから3.5Secの間です。

注: 10:1“Opto”モードでは、プログラムに依存する動作のためにリリースが最大20Secまで延長されます。

アウトプット

アウトプットは、プラグインのアウトプットでシグナルレベルを調整します。ハードウェアのノンリニア・アウトプットアンプのレスポンスは完璧にエミュレートされています。

ヘッドルーム(HR)

ヘッドルームコントロールは、オリジナルハードウェアには無いUAD専用の機能です。ヘッドルームにより、プラグインがプロセッシング中に歪んだりしないようにプラグインの内部操作のリファレンスレベルを調整することができます。ヘッドルームは、ベストな操作レベルのマッチングを実現、またはクリエイティブに使用して、プロセッサの音域を拡張させることができます。



ヘッドルームを微調整することによって、ノンリニアI/Oディストーションとコンプレッションレスポンスとくせいをシグナルインプット・レベルとは関係なく調整可能です。(コントロールを反時計回りに回して)ヘッドルームを増加させると、インプットシグナルをプロセッシングする前にブーストさせることができます。

ヘッドルームは、4、8、12、16、20、24、28(dB単位)設定が可能です。デフォルト値は、(ネジのドットが12時の位置にある場合)16 dBです。ヘッドルームは、dB値が減少するにつれて増加することに注意してください。

ヒント: ラベル“HR”をクリックすると、コントロールをデフォルト値に戻すことができます。

より高いdB値では、シグナルはプラグインをプロセッシングしやすくなります。プロセッシング量が少なく、カラーがあまり付いていない場合、コントロールを低い値に設定してください。

注: ヘッドルームを調整する際、一時的にゲインが増加することを避けるために、このコントロールをオートメーション化することはお勧めしません。

ミックス

プラグイン内でプロセッシングされたシグナルと、オリジナルのドライシグナルとのミックスバランスをコントロールすることができます。このパラメーターは、DAWに新たにルーティングを作成することなく、パラレルコンプレッションを行うことができます。

注: ミックスコントロールは、オリジナルハードウェアには存在しません。

ミックスが“Dry”に設定されている場合、プロセッシング前のソースシグナルのみが出力されます。“Comp(デフォルト)”に設定するとプロセッシング後(ウェット)のシグナルのみが出力されます。ノブについている点が上を向いている場合は50%となり、ドライとウェットのシグナルが等しくブレンドされて出力されます。このバランスは、コントロールレンジ全体にわたって連続可変が可能です、正確な位相を提供します。

ヒント: テキストラベル“Dry”をクリックするとコントロールを最小位置に、“Comp”をクリックすると最大位置に設定します。

Empirical Labsの操作について

EL8 Distressor の設計者Dave Derrより

Distressorをはじめてお使いになる場合

Where to start – 5 5 5 5

レシオを6:1から始め、4つのノブをすべて中央の5に設定してください。この設定は様々な用途の出発点として最適です。LEDがレシオ6:1(黄色く点灯)を指すまでレシオボタンを押してください。適切なコンプレッションを得るためにインプットを調整してください。よりハードにドライブさせると、コンプレッションは強くなっていきます。より明確なコンプレッションを必要とする場合、レシオボタンを押してより高い値のレシオを選択してください。低い値を望む場合は、2:1、3:1、4:1を選択すると柔らかいニーで滑らかなコンプレッションが得られます。レシオが2:1の場合は、+15 dBのニーを持ちますが、その比率は徐々に増加していきます。ユニットは、“Nuke”の次には低いレシオへと戻りますが、1:1になった場合、コンプレッションがオフになり、シグナルがピークインプットレベルまで膨らむことがあり、聴覚的に危険なほど大きな音になる場合があります。レシオを変更する際は、音楽を止めてから行ってください。+4テーブルレベルの場合は、アウトプットノブを8に設定してみてください。

ディストーションセッティング

“オーディオ”エリアのすべてのLEDが消灯している場合は、Distressorはもともとクリーンなモードで動作中です。ディストーション・セッティングを加えると適量のアナログ・ハーモニック感を加える事ができます。Dist 2モードはコンプレッション時に2次倍音を加えることで“Class A”タイプの独特の温かみを加えます。Dist 3は2次倍音に加えて3次倍音を加えます。Dist 3モードのサウンドは、アナログテープの持つ歪みによく似ており、波形の上部と下部が徐々にフラットになります。デジタルシグナルのサウンドをアナログテープのような温かい質感にしたい場合は2:1モードでDist 3をセレクトし、1~3dB程度のコンプレッションを得られるようにセッティングしてみてください。テープのサチュレーションサウンドは、速いので、速いアタックとリリースセッティングが適切です。オーバーサチュレーションしたテープのようなサウンドを得たい場合、より高いレシオとインプットをドライブさせ、1~5dBのコンプレッションを得られるようにセッティングしてください。Dist2モードで速いリリースにすると2次倍音が強調されます。3~5dBのリダクションでhあ、テープのようなサウンドよりもコンプレッション感が強調されます。

アドバンスディテクター機能

新しく使い始めたユーザーは、快適に使用できるようになるまで、基本的な設定を使用したいと思うかもボタンを押すだけで簡単に高度なサイドチェイン機能を使用することも可能です。ボーカルトラッキング時の“P”や“B”音などによるポップ音や吹かれなどがマイクに当たり、コンプレッサーが不用意に強くかかる場合があります。この場合、ボーカルレベルが不自然に低下することがあります。ディテクターボタンを一回押すと、ディテクターにハイパス(HP)フィルターが動作を始めます。このハイパス(ローカット)では低周波数帯のコンプレッションでトリガーすることはできません。マイクに風を吹き付ける“P”や“B”音によるボーカルレベルの不自然な低下を防ぎます。このような用途ではHPが有効です。

2番目のディテクターサイドチェイン・フィルターを選択するには2回ボタンを押してください。これは、ディテクターサーキットにEQを挿入する“バンドエンファシス機能”が有効になります。これにより、サーキットは中域周波数に対して敏感に反応するようになります。これは、(高域に特徴のある)ボーカル、ギター、シンセ、そしてミックス内で目立ちすぎる可能性のあるソロ楽器などに最適です。詳細については、“ディテクターモード”を参照してください。

セッティング例

一般的に、ビンテージ設計であるため、ユニットのサウンドが不自然になることはありません。レシオとリリースタイムがもっとも重要なパラメーターであると言えます。もう一度いいますが、リリースノブは、約“5”から始めると良いでしょう。アタックは、50uSecから30mSecの間で可変します。リリースは、50mSecから3Secの間で可変します。パーカッシブな素材の場合、アタックが必要な場合は、アタックを時計回りに回してアタックを遅くすることでアタック感が得られます。逆にピックノイズやトランジェントサウンドを取り除く必要がある場合には、速いアタックとリリースが必要です。これらのツールを使用することで、エンジニアはサウンドをコントロールし、アタックを加えたり、取り除いたりし、サステイン、スムージングなどを施してミックスに合わせることができます。

ボーカルテープのようなサウンドを得る場合、すべてのディストーションモードをオフに設定しますが、ディテクターパスとオーディオパスの両方でハイパス(HP)を使用すると良いでしょう。レシオを6:1以下、アタックを5、リリースを4に設定してください。インプットを調整して3~17 dBのコンプレッションが得られるようにしてください。バンドエンファシスの設定がダイナミックなボーカルのパッセージを強調するために使用すると有効な場合もあります。ミックスダウン時は、Dist 2を加えるとボーカルのエッジに温かみを持たせられます。10:1の“OPT”モードでは、クラシックなコンプレッションカーブが得られます。その場合、レシオは、10:1で、アタックは10、リリースを0の設定を試してください。ディテクター機能も有効にすると効果的です。

著名なプロデューサーが使用する、よりアグレッシブに聴こえるボーカルコンプレッサーのセッティング:レシオ6:1、アタック2.5~3.5、リリース0~2、オーディオモードHP & Dist 2。ソフトなパッセージでは、コンプレッションは起きず、大きな音量では17~20dBのコンプレッションが行われます。このセッティングはトラッキングやミックス時に使用されています。

ベース - レシオ4:1、6:1、アタック5、リリース4:ディストーションオーディオモードでの使用は素晴らしいサウンドが得られますが、テープ/HDで使用する場合は注意が必要です。歪みを無くすことはできません。アタックが強いベースサウンドの場合、ディテクターのバンドエンファシスを使用するとサウンドをフラットに仕上げます。ポンピングが起こらないように速いアタックとリリースを使用してください。“Opto”モードも試してみてください。

エレキギター - 様々なセッティングで使用することができます。エッジの効いたアタックを抑えるには、速いアタックと中程度のリリースを使用し、ソロをスムーズにするには、ディテクターのバンドエンファシスを使用し、弱くソフトなノートやサスティンを得たい場合は、“Opto”モードを試してみてください。

アコースティックギター - Distressorによって今までになかった最高のアコースティックギターサウンドを得ることができるとエンジニアから評価を受けています。レシオを6:1、[7、2、5、7]セッティング(インプット7、アタック2、リリース5、アウトプット7)を使用してください。ハイパス(HP)は、ディテクターとオーディオの両方のモードで有効です。ピッキングノイズが抑えられサスティンも得られます。

ピアノ/キーボード - 速いアタック(0~4)、中間のリリース(4~6)からはじめると良いでしょう。アコースティックピアノはアタックが少なめの方がミックスには適している場合が多くありますが、多くの例が他にもあります。Bruce Hornsbyのようなピアノサウンドは、中間のアタックとリリースを使用することが多く、アタック5、リリース5程度から試してください。この場合でもOptoモードは有効です。場合によっては、バンドエンファシスを使用して高域部分を余分にコンプレッションすることも可能です。

Drums - まず、アタックを3以上に設定し、トランジェントをキープします。前に張り付くようなサウンドをえるためにディケイを調整してください。幅広いアタックによりDistressorは、従来のコンプレッサーよりもドラムの“パーカッシブ”さのコントロールに長けています。

スネア/キック/タム - [3:1 から6:1、そして 6、5、5、6]を試してください。リングの後を持ち上げる必要がある場合は、ディケイを短くしてください。タムがあまりにも多いアタックを持つ場合、アタックを0~4の間に下げてください。低周波数域の影響でサウンドに悪影響がある場合は、長めのアタック、リリースまたは、ディテクターのハイパスを試してください。キックには、Optoモード(10:1、アタック10、リリース0)とディテクターのハイパスを使用すると素晴らしいサウンドが得られます。

ルームマイク - 過激なリミッターサウンドが必要な場合、レシオを20:1、または“Nuke”にし、[10、6、2.5、6]に設定してください。レシオ“Nuke”は、当初ルームマイクのために開発されましたが、それ以来多くの用途でも使用されました。“Nuke”と20:1は、ブリックウォールリミッターで、どんなシグナルにも1 dB以内のリミッティングを提供します。ルームマイクを楽器の3m~7.5m程に設置し、アタックを5、リリースを3、15~20dB程度のコンプレッションが得られるようにすると、LED ZEPPELINのJohn Bonhamのようなサウンドが得られます。“Nuke”では、他のレシオよりも低いアウトプットになります。

20dBのコンプレッションを行うとノイズフロアも同じように上がるので、S/Nの良いマイクやプリアンプを使用してください。大きなサウンドの場合、リリースは3以下で、他のキットと混在させると効果がより一層出やすくなります。ルームアンビエンスは、タムとスネアリングので大きくなるようにすると近接マイクの後ろに配置することができます。ザラついたサウンドを得たい場合は、Dist2、Dist3を試してください。

レシオとそのカーブ

Distressorの各レシオモードは、スレッシュホールドとレシオの両方を調整します。これは、簡単な設定でありながら、多彩なコンプレッションカーブを提供します。1:1モードでは、コンプレッションされませんが、オーディオをユニットのサーキットに通すことでアナログの温かさを加えることができます。レシオ2~6では、トラッキングに最適な多用途のカーブです。2:1と3:1は、放物線のニーを持ち、非常に穏やかなカーブで、一般的にはハードリミッティングにはならないため、オーバーロードプロテクションを起こすことはありません。。4:1と6:1も一般的に使われるカーブですが、よりハードリミッティング寄りのサウンドが得られます。6:1では、ボーカル、ベース、アコースティック楽器に非常に適しています。これはニーに達するまでに緩やかなカーブがあり、音楽的なピークリミッティングを行うことができます。6:1と10:1のOptoレシオは、60年代、70年代を思い起こさせる短いニーのリミッティングが得られます。(クラシックエミュレーションを参照)

“Nuke”はまた違ったレシオです。NUKEは、ルームマイク用に開発されましたがルームマイクに限らず、多くのサウンドで使用することができます。。NUKEは中程度のスレッシュホールドを持ち、爆発的な信号もアウトプットレベルでは平均化されます。ブリックウォールリミッティングでは、どのシグナルも1dB以内のリミッティングを提供します。ルームマイクや楽器(特にドラム)のレコーディングではアタックを4、リリースを2に設定してみてください。“Nuke”のリリースカーブは対数的で、最初は速く消え、その後はだんだんと弱くなっていきます。このリリースカーブがDistressorサウンドの特徴とも言えます。様々なリリースタイムを試すことでどのようなサウンドにも適したエフェクトを提供します。20:1は、リリースのスロープが違うものの、“Nuke”に近いフィーリングを得ることができます。

これらのカーブはそれぞれリリーススロープがわずかに変化し、ニーが異なる場所になることでそれぞれのフィーリングを持ちます。2:1、10:1、Nukeレシオは、特別なディテクターサーキットを使用しています。

ソフトニーとは？

“ソフトニー”とは、低いレシオで最初の数dBのゲインリダクションが起こり、シグナルが増加するにつれて徐々にレシオが増加するコンプレッションカーブです。これによりコンプレッションの開始が検出しにくくなります。ニーは、通常数dBの間上昇し、最終的なレシオへ向かって徐々にフラットになります。20:1と“Nuke”を除くすべてのカーブは、それぞれ固有のものを持っています。レシオが2:1の場合、アタックとリリースの設定に応じて30dBまでの長さのニーがあります。

クラシックエミュレーション

古いコンプレッサートポロジーに基づいているため、クラシックなコンプレッサーと非常に似たサウンドを得ることができます。適切な設定をすることで、オプトカプラー、FET、2極/3極チューブバイアス、“mu”タイプのモジュレーションなどクラシックなゲインリダクションのノンリニアを再現しています。“Opto”モードではレシオ10:1を提供しています。

セッティング例:

- 古いオプト-VCAモデル(LA-2A、LA-3A、LA-4A)のシミュレートを試すには、アタック10、リリース0、Det HPをオンにしてください。インプットとアウトプットを好みに合わせて調整してください。Optoのフィーリングを保つためにアタックを4以上にしてください。より速いアタックは、よりアグレッシブなサウンドになります。Distressor のLEDメーターは古いコンプレッサのVUよりも速く動作することを覚えておいてください。チューブをエミュレートする場合は、耳をガイドにDist 2 & 3モードを試してみてください。
- クラシックな“オーバー E-Z”サウンドの場合、レシオ2:1~6:1、アタック9、リリース2のクリーンモードでお試しください。
- 1176LN レシオ6:1、アタック0~3.5、リリース1~10.5。レシオ3:1、4:1、6:1、20:1を使用して4つの1176LNMPレシオをエミュレートしています。クリーンモードでの使用が適しています。1176LNのアタックは、非常に高速で、アタックを4以下に抑える必要があります。わかりやすいサウンドは、レシオ6:1、アタック2、リリース4です。
- オールドのFairchild GFET レシオ 6:1、アタック3~5、リリース2~7(アタック/リリース共に4からスタートが望ましい)

トランスレス設計であるため、低いトランジェントのインターモジュレーション・ディストーションは維持されますが、ディストーションモードがオンの場合、2次、3次ハーモニックディストーションによって温かさを得ることができます。また、古いユニットとは異なり、Distressor はユニット間で統一されており、結果の予測が容易です。正確なファクトリーキャリブレーションにより、別のDistressorを使用してもこれらの設定は同じ結果が得られます。

Empirical Labsは、Universal Audioにクラシックなオーディオ機材だけを作成するだけでなく、モデルナンバーも参考にしてくれたことに感謝します。彼らが言うように、“名機は、いつの日も 名機。”



*Empirical Labs EL8 Distressor*ハードウェア

EL8 Distressorへのすべての視覚的、聴覚的な言及、及びEMPIRICAL LABSの商標はすべてEMPIRICAL LABS, INC.により書面による許諾を得て行われています。このプロジェクトをサポートして頂いたDave Derrlに特別な感謝を表します。